

サウンドスケープ

エドアルド・オツキオネーロ

断片を通じてしか、この世は耳の後側で再構成せず。「いっぱい飛んでいる」と松崎が言い「ボラだね」と。歩行を渡ると、右手にはみなとみらいの未来派っぽい建物たち、左手には山里のごとくケーブルカーがあり。

満員電車で「スミマセン、オリマス」と、手摺を掴む無数の手に陰らされた女の方が、とうとう品川で降りる。時刻は暗黒で、共感覚に従い夕焼けさえ紙を燃やす音を立てる。

「お取り忘れにご注意ください、オトリワスレニゴチュウイクダサイ」スイカチャージ後の自動音声。「下りエスカレーターです、クダリエスカレーターデス」。ふたつと靴がアスファルトに蹟く。

音風景に浸っている状態で、「私、ワタシ」と口を酸っぱくすることは無用である。それは他の音帯域に自らの基本周波数で反応するだけの横隔膜にすぎない。目覚まし時計のチリンチリンと鳴る何かの音でとめどなく目を覚ますのが生きていることである。「あれって、鴉」と子供が叫び、それは「からす」の音響実現であり、且つその鳴き声。

人生は、よそへ向かうことであり、あらゆる路上も歪み、ノイズも階層制度なしに紛れ込む。モーラは聴覚的理解の基礎要素という。

では、死ぬとは何か。死ぬとは、耳の中で空の袋の気配がする、つまり蝸牛孔が止まること、永久に。